

マウスを用いたプラセンタの急性毒性試験(概要)

■**試験目的**：検体について、マウスにおける急性経口毒性を調べる。

■**実施機関**：(財)日本食品分析センター多摩研究所

■**検体、他**

- ・FD プラセンタ 100 (性状：茶色粉末)
- ・検体を注射用水で懸濁し、100 mg/ml の試験液を調製した。

■**試験動物**

5 週齢の ICR 系雌雄マウスを日本エスエルシー(株)から購入し、約 1 週間の予備飼育を行って、一般状態に異常のないことを確認した後、試験に使用した。試験動物は、ポリカーポネート製ケージに各 5 匹収容し、室温 23°C±2°C、照明時間 12 時間/日に設定した飼育室において飼育した。飼料 (マウス、ラット用固型飼料：ラボ MR ストック、日本農産工業(株)) および飲料水 (水道水) は、自由に摂取させた。

■**試験方法**

検体投与用量として 2,000 mg/kg を投与する試験群及び溶媒対照として注射用水を投与する対照群を設定し、各群につき雌雄それぞれ 5 匹を用いた。

投与前に約 4 時間試験動物を絶食させた。体重を測定した後、試験群には試験液、対照群には注射用水をそれぞれ 20ml/kg の投与容量で胃ゾンデを用いて強制単回経口投与した。

観察期間は 14 日間とし、投与日は頻回、翌日から 1 日 1 回の観察を行った。投与後 7 日及び 14 日に体重を測定し、t - 検定により有意水準 5% で群間比較を行った。観察期間終了後に動物すべてを剖検した。

■**試験結果**

- ①死亡例：雌雄共に、いずれの投与群においても、観察期間中に死亡例は認められなかった。
- ②一般状態：雌雄共に、いずれの投与群においても、観察期間中に異常は見られなかった。
- ③体重変化：投与後 7 日及び 14 日の体重測定において、雌雄共に試験群は対照群と比べ体重値に差がなかった。
- ④剖検：観察期間終了後の剖検では、雌雄共に全ての試験動物に異常は見られなかった。

■**考 察**

検体について、マウスを用いた急性経口毒性試験 (限度試験) を実施した。検体を 2,000 mg/kg の用量で単回経口投与した結果、観察期間中に異常及び死亡例は認められなかった。

従って、検体のマウスにおける単回経口投与による LD50 値は、雌雄共に 2,000 mg/kg 以上であるものと考えられた。

■**資料提供**：三共理化工業(株)